

沖永良部島の南洲翁史跡

— 歴史を訪ねる旅 (10) —



下土橋 渡

戊辰戦争ぼしんの戦後処理で西郷隆盛の下した処置が温情ある極めて寛大ものだったことに感じ入った庄内（現在の山形県鶴岡市、酒田市）の人たちは、後年、財団法人庄内南洲会を設立し、昭和五十一年（一九七六年）に酒田市内に庄内南洲神社を創建しました。その神社を七年振りに再訪したのは、今年（二〇一七年）六月初めのことでした。

その旅から帰ってしばらくしてインターネットで庄内南洲神社のことを調べていると、庄内南洲会の会員の方のブログが目に入りました。今、庄内南洲神社の境内に鹿児島県沖

永良部島特産の『えらぶゆり』がまるで楽園のように咲き誇っているというのです。沖永良部島の和泊町から贈られたゆりが庄内南洲神社の境内に植えられていたのです。

沖永良部島（鹿児島県大島郡）は幕末、薩摩藩主島津久光の逆鱗に触れた西郷隆盛が流刑された島です。西郷は一年六ヶ月を囚人として沖永良部島で暮らしますが、昼夜囲いのある牢屋に閉じ込められた過酷な生活の中で体得したのが『敬天愛人』の思想だといわれます。沖永良部島は『敬天愛人』発祥の島なわけです。和泊町には、南洲翁の遺徳を慕って、上陸地や謫居たらしきの地に記念碑、西郷南洲記念館、南洲神社が建立されています。

そのような誼よしみによって、山形県酒田市の庄内南洲会と沖永良部島の和泊西郷南洲顕正会との間で交流が続けられています。今年の二月には、庄内南洲会の会員二十五名が沖永良

部島を訪れて、南洲神社、西郷南洲記念館、知名町の昇竜洞などを訪問し、和泊西郷南洲顕彰会の会員らと交流を行いました。

これに対して、六月に今度は、和泊西郷南洲顕正会のメンバーが酒田市を訪れ、歓迎交流会が催されました。沖永良部民謡『えらぶゆりの花』や『サイサイ節』、薩摩琵琶『西郷隆盛』、詩吟『獄中感有り』、伝統芸能『酒田獅子舞』などが披露され、来年のNHK大河ドラマが『西郷どん』ということもあって大変盛り上がったそうです。

沖永良部島には十一年前に一度行ったことがあります、そのときは仕事での訪島だったので南洲翁史跡巡りはできませんでした。そこで、今回七月、意を決して沖永良部島への再訪を果たしました。

一、西郷隆盛上陸の地

西郷は最初徳之島に流されますが、二ヶ月

余りのち、さらに沖永良部島へ島送りとなりました。西郷を乗せた船は、文久二年（一八六二年）八月十四日朝、徳之島の井之川を出帆、その日の午後、沖永良部島伊延港に到着しましたが、予告がなかったため、誰も出迎える者はいませんでした。護送役の徳之島東間切の横目が代官・黒葛原源助に命令書を書いて、はじめて西郷の沖永良部島遠島のことを知れます。命令書には、『着島の上は必ず囲いの中に入れて、絶対に外に出してはいけない。』と書いてありました。今までも遠島罪人はたくさん送られて来ましたが、囲いに入れなければならない重罪人は初めてでした。代官は牢屋を与人役所隣に早急に建設するよう手配し、十六日急造の牢屋が竣工しました。牢屋が完成するまでの二日間を西郷は船牢で過ごします。西郷隆盛二十六歳のときでした。

牢屋が出来上って、代官・黒葛原源助、付



記念碑の回りにはアダンの実が真っ赤に熟れていました。



西郷隆盛上陸の地記念碑（沖永良部島、和泊町伊延港）

役・福山清蔵、間切横目(警備の警察官)・土持政照らが伊延港まで出迎えに行き、乗馬をすすめますが、西郷は『いや私は牢に入る身、もう二度と土を踏むことはないと思うので、どうか歩かせて欲しい。』と切に徒歩を願い、牢屋のある和泊まで四キロの山道を歩きました。

伊延港には、『西郷隆盛上陸の地』の記念碑が建てられています。碑の周囲にはアダンの実が真っ赤に熟れていて、いかにも奄美諸島の島らしい雰囲気を醸し出していました。

二、西郷南洲翁謫居の地

和泊に着くと、酒肴の準備がしてありましたが、西郷はそれを固辞し、自ら牢屋に入り、牢番に『錠はおろしたか』と念を押したそうです。牢屋の広さは一間半角(二坪余り)で、四寸角材の格子囲みで戸もなければ壁もなく、牢内には便所・小炉・板屏風があるだけで甚

だ狭隘なものでした。沖永良部島といえ、本土よりも沖繩に近く、高温多湿で非常に雨量も多い島。吹きざらし、雨ざらしに等しい牢屋での生活は、まさに西郷に死ねよと言わんばかりの処罰でした。牢中の西郷は、湯水を求めず、煙草を断ち、朝だけ牢番に飯を炊かせ、昼と夜の二食は、冷飯をお湯で温めて食し、牢中に静座して、読書、沈思黙想の毎日を過しました。

文久二年(一八六二年)二月に奄美大島潜居から鹿児島に戻った西郷は、島津久光に召されますが、久光の上洛計画に対して、久光が無官で斉彬ほどの人望が無いことを理由に反対し、面と向かって『地ゴロ』(田舎者)なので上洛周旋は無理だといって、久光の不興を買ったと伝えられています。それが事実だとすれば、家臣の忠義に反した自らの行為を深く反省していたに違いありません。幼少時



西郷隆盛流謫の地に再現された牢屋、右に『敬天愛人』発祥地の記念碑



静座して沈思黙想中の西郷隆盛。恰幅の良い翁の面影はありません。

から郷中教育で鍛錬を積んできた藩士の心意気をもつて、獄中で端然と座禅を組んだのでしよう。その様子を見て間切横目の土持政照が拍子木を持ってきて、用のあるときはこれを打つようにすすめましたが、一度も討つことはなかったそうです。

三、土持政照

しかし、西郷とて生身の人間。このような生活が続いたため、髪は乱れ、ひげは伸び、日一日と衰弱するばかりでした。日に日に衰える西郷を見廻った政照は、牢死の恐れを感じ、対策を思案します。命令書に書かれている『圜入』の二文字から、座敷牢への改築を思いつきました。早速、代官の許可を得て、自費で牢改築に着手しました。牢が出来上がるまでの間、西郷は福山清蔵預かりとし、土持家で謹慎することになりました。政照は西郷をできるだけ牢外で過ごさせるために、こ

とさら建築を遅延させ、二十余日にして工事をようやく終了させました。その間、政照とその母ツルは、この機会に西郷の健康を回復させたいと思い、真心こめてもてなしました。西郷は、土持政照とその家族との交流の中で健康を回復し、次第に落ちつきを取り戻していきました。不遇の身に土持一家の温情は一入身に沁みただけでしよう、西郷は政照と義兄弟の契りを結び、その交誼は終始途絶えることがなかったといわれます（土持政照は西郷より六歳年下でした）。二人の交誼がいかに深いものであったかを物語る漢詩が、西郷南洲翁謫居の地に建てられた土持政照翁の胸像の碑に刻まれています。元治元年（一八六四年）二月、西郷が沖永良部から鹿児島へ帰ることになったときに、政照との別れを詠んだ漢詩です。

留別政照子

別離如夢又如雲、

欲去還來淚汨汨

獄裡仁恩謝無語

遠凌波浪瘦思君

(訳) 君と別れなければならぬことになったが、思えば夢のようでもあり、また雲のようでもあって、立ち去ろうとしてはまた立ちかえって来て、別離を悲しむ涙が止めどもなく流れ出る。顧みれば、長い間の牢獄生活中の君のなさけ深い恩義は、何とお礼を言ってもいやら適切な言葉がない。今遠い浪路を越えて鹿児島に帰って行ったら、夜も昼も君を思い慕って、ただやせにやせていく事であろう。

さて、新しい牢屋に移ると操坦勁、沖利経、鎌田宗円、矢野忠正、市来惟信、町田順円、



『西郷隆盛流滴の地』に建てられている土持政照(右)と操坦勁(左)の胸像

沖緝賢等の弟子たちが牢外に座つて教えを受
けました。西郷が島を離れる頃には塾生の数
は二〇名程になつていたといわれます。西郷
の高潔偉大な人格は、これらの少年たちに大
きな感動を与え、後に成人して島の指導者と
なり、敬天愛人の精神をうけついで、島の振
興発展に大きく貢献しました。

塾生の一人、操坦勁の祖父は琉球へ渡つて
唐語を習得し、鹿児島で医術を修めた当時の
島の代表的知識人だったので、操家には多く
の蔵書がありました。西郷はこの蔵書を借り
て読書に没頭したといわれます。沖永良部島
で西郷が読んだ本は、論語、孟子、大学、中
庸、莊子、韓非子、史記、陶淵明全集、近思
録、洗心洞筭記(大塩平八郎)、嚶鳴館遺草(細
井平洲)、言志録(佐藤一斎)など、極めて多
岐にわたつたといわれています。佐藤一斎の
言志録などは、一一三三箇条ある言葉の中か

ら特に感動した 一〇一箇条を選んで書き写
し、自分だけの『言志四録』(南洲手抄言志録
一〇一箇条)をつくつて人生のいましめにし、
西南の役で城山において自刃するまで肌身離
さず身につけていたといわれます。

四、川口雪篷との出会い

西郷隆盛が沖永良部島流謫中、同じく沖永
良部島に島流しになつていた川口雪篷(せっぽう)という
人がいました。陽明学を深く研究した人で、
詩や書の達人でしたが、とにかく大変な酒好
きでした。島津久光の写字生を勤めていたあ
るとき、酒をかうお金が無くなり、久光の大
事な書物を質に入れて、その金で焼酎を飲ん
でいたことが露見して沖永良部島に流されま
した(一説には、罪人ではなかったけれど、
わざわざ沖永良部島に住まって西郷の書や詩
作の指導をしたとする説もあるそうです)。

土持政照が雪篷に会つたある日のこと、

『大島吉之助という人が島流しになって和泊の牢屋に入っているそうだが、ぜひ会って慰めたい。自分を紹介してくれ』といわれます。西郷に話すと大変喜び、そんな人ならぜひ会いたいといい、早速雪篷は西郷に会いに行きました。二人は初対面から大いに意気投合し、雪篷は自分が住む西原から四キロ弱離れた和泊の西郷の座敷牢まで毎日のように通っては、時世を論じ学問を語り、書や詩作を教えるようになりました。

西郷より少し遅れて鹿児島に帰った雪篷は西郷邸に飄然と現れてそのまま西郷家に住みつき、留守居役を果たすとともに、西郷の子弟の書や漢学の師ともなりました。西郷亡き後は西郷家の家族を守り、明治二十二年（一八八九年）に大日本帝国憲法発布に伴う大赦で西郷の名誉が回復されたことを見届けるように、翌年病没しました。

五、社会法

山形県酒田市にある荘内南洲神社に、西郷隆盛が土持政照に与えたという巻物六巻が陳列されていて、『その中の一卷は社会法といつて備荒貯蓄を教えたものである。』とあります。元治元年（一八六四年）一月頃になって赦免召還の噂が流れてくると、『与人役大躰』『間切横目大躰』を書いて島役人のための心得とさせ、社会設立の文書を作つて政照に与え、飢饉に備えさせました。

沖永良部島は台風・日照りなど自然災害が多いところです。しかも絶海の孤島ですので、災害が起きると自力で立ち直る以外に方法がありません。そのことを知つた西郷は『社会趣意書』を書いて政照に与えたのです。社会はもともと朱熹（中国南宋の儒学者）の建議で始められたもので、飢饉などに備えて村民が穀物や金などを備蓄し、相互共済するもの



西郷隆盛が土持政照に書き与えた『巻物六卷』（荘内南洲神社蔵）



西郷公御筆『與人間切横目大駄』（荘内南洲神社蔵）

で、江戸時代前期の朱子学者・山崎闇斎がこの制度の普及に努めて農村で広く行われていました。若い頃から朱子学を学び、また郡方であった西郷は職務からして、この制度に詳しくあったのでしよう。

この西郷の『社倉趣意書』は土持が与人となった後の明治三年（一八七〇年）に実行にうつされ、沖永良部社倉が作られました。この社倉は明治三十二年（一八九九年）に解散するまで続けられ、明治中期には二万円もの余剰金が出るほどになったといえます。この間、飢饉時の救恤の他に、貧窮者の援助、病院の建設、学資の援助など、島内の多くの人々の役に立ちました。解散時には、千五百円が『西郷隆盛謫居之地』の記念碑と『南洲文庫』を建てる費用に、五百円が『土持政照翁彰徳碑』を建てる費用に寄付され、残りが和泊村と知名村に半分ずつ分けられ、両村の大事な

基金になりました。明治三十五年（一九〇二年）に、矢野恒太による日本最初の本格的相互会社（第一生命保険相互会社）が誕生しますが、沖永良部社倉はそれより三〇年余り早くできた協同組合、相互組織でした。

六、南洲神社

南洲神社は、西郷南洲翁を慕う島民たちによつて明治三十五年（一九〇三年）に和泊（和泊町手々知名）に建立されました。建てられた場所は『前問殿内屋敷跡』という史跡内で、敷地内には向かつて右側に南洲神社、左手には招魂社があり、南洲文庫跡の碑もあります。史跡の説明板につきのようにあります。

『明治十三年（十五年）、沖永良部島が十二区、六区分された時の戸長、町田実矩（町田精男の先祖）生誕の地である。実矩は操垣勁らと共に流謫中の西郷隆盛から教育を受けた



南洲神社（沖永良部島、和泊町手々知名）右端に南洲文庫跡の碑も見えます。



猟犬をつれた西郷像（沖永良部島、南洲神社）

少年二〇人の中の一人である。父左右悦は、与人沖蘇延良らと共に、西郷の談話の相手をつとめた。明治三十四年、時の村長、坂本元明から、西郷神社建設用地として最適地であるので譲ってほしいとの要請があり村へ譲渡した。自らは後原の砂地へ転居した。屋敷内には明治三十五年に南洲神社が、同三十八年には招魂社が同四十三年に南洲文庫が建設された。以降昭和四十三年には手々知名字公民館が、平成四年には沖元綱翁顕彰胸像が建設され、日曜学校の場として、地域住民の学び、ふれあいの場等として広く活用されている。

平成十九年十二月 手々知名字」

【参考図書、参考サイト】

- (1) 西郷隆盛 ― ウィキペディア
- (2) 沖永良部の西郷さん／敬天愛人フォーラム21

(3) 立元幸治・著『器量と人望 西郷隆盛という磁力』(PHP新書)

(4) 土持政照(奄美の人物)『奄美回想録』

(5) 川口雪篷 ― ウィキペディア

その他、和泊町歴史民俗資料館に展示してあったパネル「島の西郷さん物語(その3)」
「西郷隆盛上陸の地」沖永良部島の西郷さん
その2」などを参考にしました。

(元九州職業能力開発大学校教授)

